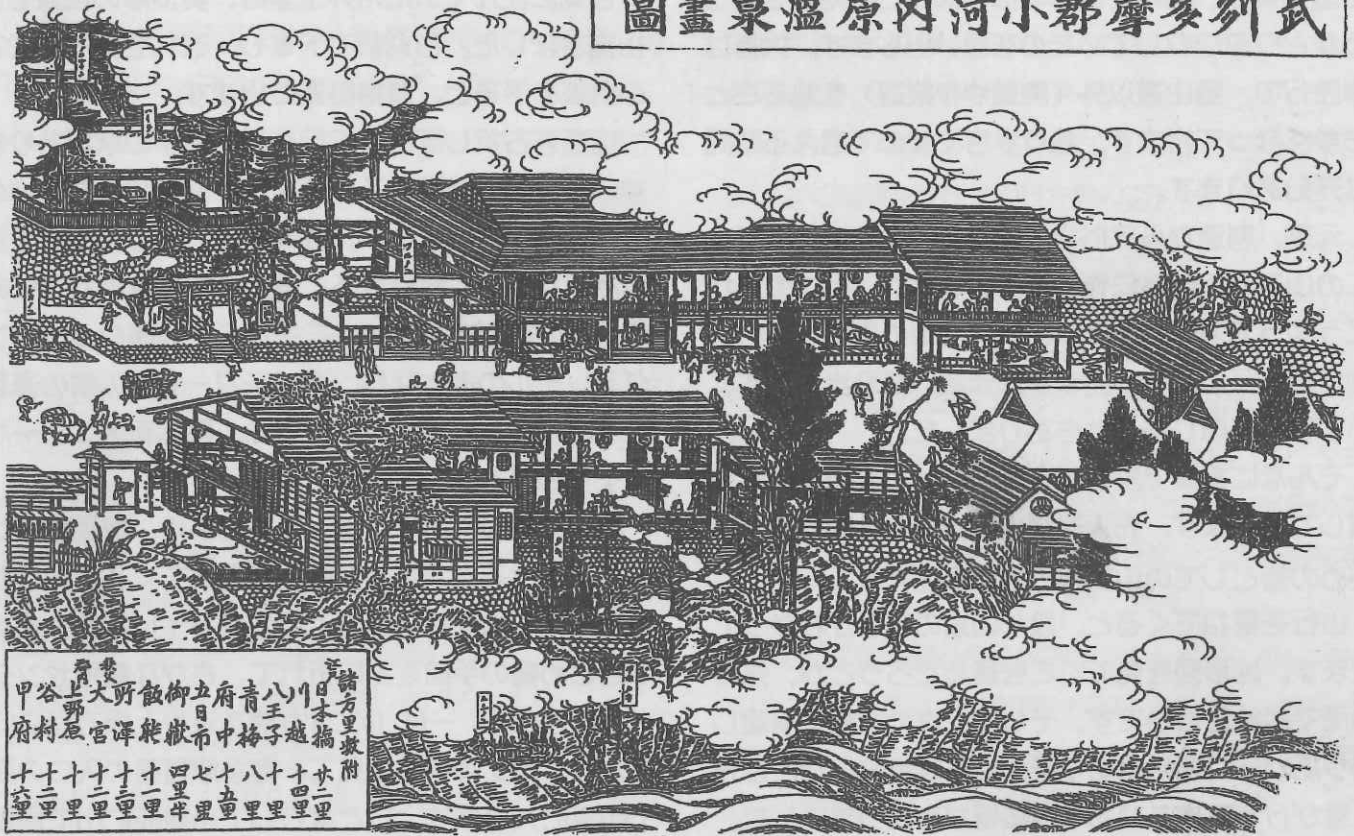




## 武列多摩郡小河内原温泉泉畫圖



甲谷	上野	大野	飯沼	御殿	五日市	府中	青王	八王子	日本橋	諸方里
府村	辰宮	野宮	深澤	能登	市街	中街	梅子	越前	水二	附
十二里	十二里	十二里	十二里	十二里	四里半	七里	十五里	八里	十四里	六里

武州多摩郡小河内原温泉は、江戸時代に旅好きの坊さん・十方庵敬順が書いた『遊歴雑記』によると湯河原の湯よりも十倍も良いと断言しています。事実、今でも奥多摩湖の底から汲み上げている「鶴の湯」の泉質は関東では上位にあります。

上の絵は、温泉PR用の版画で32cm×42cmの大きさです。絵の中に記されている片仮名を読むと、中央に「ツルノユ（鶴の湯）」、左に「シカノユ（鹿の湯）」、下に「ムシノユ（虫の湯）」と読み取れます。白い雲のように描かれているのは、立ち上る湯気でしょうか。

この絵では、分かりにくいのですが、馬や駕籠に乗る人、天秤で湯樽を運ぶ人から大きな荷物を背負う人までいろいろ。部屋の中では、談笑する人、火鉢に当たり煙草を吸う人、囲碁将棋を楽しむ人などの姿から当時の賑わいを感じるだけでなく、こんな山奥でも2階建ての建物があるとは驚きです。

青梅出身の山田早苗の『多摩川浜源日記』を読むと、天保12年（1841）8月12日、熊野権現の前に亀田鶴齋の温泉碑と芭蕉の句碑があると記しています。この温泉碑について『羽色臨視日記』の天保4年4月21日付、青梅の金剛寺の記述に「此の碑は寺に縁なけれ共故ありて此所にあり」と。

なぜ金剛寺に？ 誰が何のために建てたのか？ どうやってあの大きな石碑を小河内まで運んだのか？ 陸路か水路か？ その理由を想像するだけでも興味深いものがあります。

ところで、小河内温泉を訪ねた人を文献で探してみました。幕末～明治の人、アーネスト・サトウ。『豈止快録』の著者、元代官の林鶴梁。鶴梁に刺激された田山花袋などが明治時代に温泉を訪ね、紀行文を残しています。これらの紀行文を読むとさらに奥多摩が好きになります。（岡崎 学）

## とっておきの山歩きガイド

### 山ノ神に愛されるために

登山を始めた凡そ5年間、奥多摩の全山と主尾根踏破を目指し、かなりの頻度で奥多摩へ通って来ました。奥多摩のエアリア（登山地図）を赤マーカーで塗り潰し、喜んで眺めては、次はどの尾根を登ろうかとワクワクしていたのを思い出します。大抵は単独行で、登山道以外（廃道や作業道）を辿ることも多くなってきます。独り歩きですので考える時間は充分あります。

元来、料理から民俗学的側面を学んでいたため、この山道は何の為に作られたのかとか、どこの人がどうやって通行したとか、次第に山の生活に想いを馳せるようになってきます。また、独り歩きですとふと恐怖を感じることもありました。

そんなに言葉で説明できないことより山ノ神を意識していきます。先人達が山の自然と共存していくための術としての山ノ神の言い伝えです。

山行を重ねてくると、段々山道のことがわかってきます。地形図を見てここを通るだろうとか、先日の雨で崩れたとかです。そして、次の大雨で崩壊しそうだからここに水切りを入れれば良い、などと先人達が行ってきたであろう技術が身につきました。山道を重要な生活のライフラインとし大事にしていた先人のよう、行く度に少しずつ労を使い、行く前よりちょっとだけ良くして来れるようになりました。

また、ザックに五円玉を用意しておき祠がある度に、お供えし手を合わせたりもしました。

そして、道に迷い暗くなったり危険にあう度に「山ノ神に良いことをしてきたから大丈夫だ」なんて自分を励まして無事下山するようになります。

現在は、奥多摩に居を移し、山菜田を営んだり、登山道巡視、整備し、奥多摩の山で立生をたてております。

これから、奥多摩の先人達が山に感じていたことや行いを紹介していきます。

奥多摩の山を訪れる方が、山ノ神に愛され、気持ち良く無事下山出来ますように。（越川 隆二）

### 早春の花をたずねて

「隧道と隧道の間に春近き

日をいっぱいに浴びてゐる村や」 玉堂

白丸に住んでいた川井玉堂は、奥多摩の風景を沢山描きました。白丸駅で下車し、改札を出てすぐ右の急坂を下ると、青梅街道に出ます。

街道を右折しほどなく行くと、四季の家がありません。その前を横断するのですが、横断歩道がないので、注意してください。数馬峡橋を渡る右側に玉堂の歌碑があり、渡りきると奥田元宋の歌碑が左にあり、案内板があります。ここから大多摩ウォーキングトレイルの道となり、アースガーデンの横の道を行います。アースガーデンでは、黒豚新メニューがおすすめです。

幾つか階段もあり、落石注意もあり、数馬西トンネルを抜けると、氷川発電所が見えてくる。釣り堀を右に見て柿平橋のたもとに公衆トイレがあります。つきどめ橋の手前を左に折れて、さかな養殖センターがあります。一付（いつけ）橋を渡り上坂方面に向います。山ノ神を右に見て、奥多摩霊園の入口の所で山道に入ります。ひと登りして小樽峠に出て尾根になります。左は、鳩ノ巣・城山へ行く道になり、右の尾根を行くと一ヶ所ひらけた場所に駅方面が見渡せます。ここは、ツクバネの実が多いところです。

やがて大樽峠に着きます。御岳山裏参道に立つコナラの巨樹も、いよいよ満身創痍、多くの修験者や参拝者たちの声を聞いたことでしょう。

ここから海沢園地に下ります。キブシやダンコウバイ、アブラチャンなどの花が見られ、園地に着きます。海沢林道にある隧道付近の瀬見橋、観音橋あたりは、2月なかばから3月上旬にはフサザクラが谷をうずめてとてもきれいです。アメリカキャンプ村を過ぎ、さかな養殖場を過ぎて、つきどめ橋を渡ると発電所を左折、綾瀬橋、長畑橋を過ぎ、氷川中学校を過ぎて右折し、吊り橋を渡り、もえぎの湯に着きます。里には梅の花が咲き、カタクリの花やアツマイチゲの花も見られるかもしれません。

（原 明子）



## ～「四季つれづれ」その8～

### 「山野井泰史くんの新刊本」

奥多摩町原に住む登山家、山野井泰史くんが本を出した。山と溪谷社ヤマケイ新書から「アルピニズムと死—僕が登り続けてこられた理由」という本である。

山野井くんは単独または少人数で、酸素ボンベも使用せずヒマラヤやアンデスなどのビッグウォールや氷雪壁を、難ルートから挑み登頂を果たす世界有数のクライマーだ。奥多摩湖を望む熱海の日当りのいい借家に同じく登山家、女性クライマーでは世界屈指といえる妻、妙子さんとひっそりと暮らしている。

山野井くんの山歴は10年前に出版した自著「垂直の記憶—岩と雪の7章」に詳しい。そこには20代前半のころ彼は山の仲間たちから「天国に一番近い男」と呼ばれていた。それは山への激しいのめり込み方に加え、国内外でのソロクライミング志向にあった。

高校を卒業すると定職に就かず、アルバイトをしながらヨセミテやアルプスの大岩壁、北極圏や南米パタゴニアの冬季登攀などで次々と初登攀を成し遂げる。

そして舞台をヒマラヤに移す。8000m級のジャイアンツを相手に難ルートから果敢に挑み、敗退や挫折を味わいながらも冬季単独初登などを含む数多くの登攀を成し遂げるのである。その間アルプスやヒマラヤなどでも活躍していた女性クライマーの妙子さんと結婚もする。

2000年、世界第2位の高峰K2(8611m)南南東リブを35歳で単独無酸素初登頂を果たす。

彼の最も美しいと思える行為は、巨大な山にたった一人、高みに向けひたすら登っているクライマーの姿だという。そしてそのような登攀を実践している。

2002年、妙子さんとふたりでチベットのギャチュン・カン(7952m)に遠征。北壁を登り、登頂後悪天候に捕まる。雪崩に飛ばされ、宙吊りからの脱出。一時的に視力も失いながらも全力を使い切り、北壁に取り付いて9日後ふたりは奇跡の生還を遂げる。ここまでが前著「垂直の記憶」に綴られている。

新刊「アルピニズムと死」はその続編といえる。ギャチュン・カンの代償は大きかった。下降中の寒気と脱水など

から山野井くんは凍傷で右足全部の指と手の指5本を。妙子さんはもともと凍傷で短かった手の指全部を2割ほど残して失ってしまったのである。

一度は「もう山を終えよう」という考えが頭をよぎったが、やっぱり山を止めることはできなかった。

歩けるようになってから、ふたりは奥多摩ハイキングを手始めに、トレッキング、アイスクライミング、フリークライミング、高所クライミングと、オールラウンドにバランスよく時間をかけて山行を繰り返した。トレーニング中、山野井くんがクマに襲われるなどのアクシデントもあったが、それも乗り越えふたりは山への復帰を果たすのである。

2007年、ふたりはNHKの取材に応じ、友人とグリーンランドの北極圏に位置する未踏の大岩壁「オルカ」に遠征する。その登攀の様子はNHKのBSハイビジョンやNHKスペシャルで何度か放映されたから、彼らの生き方は山を知らない人たちにも強烈な印象と大きな感動を与えた。

彼はその後も指を失う以前までのレベルに少しでも近づくべく挑戦を続けるが無理を悟り、20年以上続けて来た高所でのソロクライミングをついに断念し、登山スタイルの変更を決意したのであった。

2013年6月、彼は山のクラブの後輩、野田賢くんを誘い、以前から狙っていたペルーアンデスに遠征した。そして初登攀を含む3つの岩壁と氷雪壁の登攀に成功した。それらの登攀は、その年最も記録的な登攀をしたアジア人に与えられるピオレドール・アジア賞に推され、韓国のソウルで表彰されたのであった。

そのパートナー野田賢くんが今年の3月、鹿島槍ヶ岳で墜死する。山野井くんは大勢の親しい友人を山に失ってきた。そして若き日に「天国に一番近い男」と言われた自分は生き残っている。肉体の限界を超えるような激しい登攀を続けて来たのに、何故か？「アルピニズムと死—僕が登り続けてこられた理由」はその疑問に答えている。山や必見の書である。

(元 青梅警察署山岳救助隊 副隊長 金 邦夫)

※ 参考文献 「ソロ」(丸山直樹/山と溪谷社)  
「垂直の記憶」(山野井泰史/山と溪谷社)

## ～奥多摩 むかしみちの昔話～

### 馬のおとむらい

むかし、むかし、岩場つづきのこのあたりは、境のがんどう場と呼ばれる難所で、小河内と氷川の間を荷を運んで往来する者にとっては、とてもつらい道すじでした。

村人は、がんどう場にさしかかると、手綱さばきにも気をつけながら、この難所を用心して通ったものでした。

それでも、馬がよく足を踏みはずして、谷へ落ちて死んだこともありました。そんなときには、氷川からサーベルをさげた、巡査が検分にやってきました。そして、「すぐに穴を掘って埋めろ。絶対に食ってはならんぞ」と、巡査はきびしく言いわたすのですが、「岩くらのもんで、深くは掘れなかんべ」とか、屁理屈を言いながら、村人たちは浅く穴を掘って埋め、念ごろにとむらいました。

さて、その日も夜ともなると、昼間は殊勝げに穴掘りをした連中が、提灯をつけて、掘り出し人に早変わりです。そして、掘り出した馬の肉を分けあい、持ち帰っては食べたといひます。

やがて、そんなことがうすうす巡査に感ずかれ、「石油をかけて燃やせ」と命ぜられるようになります。それでも村人は馬を穴に入れて、石油のにおいがついたのでは臭くて、食いものにならないから、穴の外まわりに石油をまいて、

「巡査さまにはご苦労さまでござえますだ。空っ茶でもいっぺえ…」と、近くの人家に誘って、穴のほうからは煙をどんどんあげ、焼いているように見せかけて、巡査どのにはお帰りを願い、夜ともなると、提灯をぶらさげて、また掘り出し人に早変わりです。

なかには「いつもやっけえになるから…」と、巡査におすそわけにいつて、どやされたという、きよろっけつ（うかつもの）もいたそうです。

村人は「食うのも供養のうちだんべえ」と言いながら、それでも馬頭観世音を建て、馬の冥福を祈ることは忘れなかったそうです。

発行 奥多摩町教育委員会

協力 奥多摩民話の会

## ～奥多摩の世間話～

### おハナ落し

これは、今から130年ほど前の悲しい物語です。小河内村に住むおハナは、新婚間もない暮れのある日、夫とともに氷川村まで正月の準備用品を買い出しに行きました。そして夕闇迫る帰り道のことで、薄暗い中を歩く仲睦まじい二人に悲劇が起こりました。谷側を歩いていたおハナが足を踏み外し、谷底に落ちてしまいました。その場所は、今、小河内ダムので堰堤になっていますが、当時は、水根沢橋からでないと谷底まで行けない絶壁が行く手を阻んでいる所でした。

おハナは、中山集落の人々の手を借りて救出されましたが、その夜のうちに息を引き取りました。

その後、誰言うとなく転落した場所を「おハナ落し」と呼ぶようになりました。そして、17年後の明治31年6月、おハナの17回忌の年に同じ場所でも郷の栄吉が墜落して命を落としました。美貌の人・おハナと村一番の人気者・栄吉の死を悼んで村人たちは、浄財を集めて二人を供養するとともに道の安全を願って「萬霊供養塔」を建てました。

今、私たちが安全に歩いている「むかしみち」には、過去に亡くなられた人の名をとって先生地獄とか竹蔵地獄などと呼ばれた危険箇所がいくつもあつたそうです。

現在、供養塔は、峰谷の普門寺に移されましたが、寺への石段を登って行くと右側にあります。石に彫られた文字を読むと「為河村栄吉 岡部ハナ冥福 明治三十一年十月」と読み取れます。

参考：奥多摩の世間話（青木書店）



## 奥多摩樹木雑考

### 「落ち葉のおはなし」

奥多摩の冬の森がきれいです。葉を落とし、孤々として佇む森の道。足元に降りつもった落ち葉が、淡い冬の光を集めて琥珀色にかがやいています。以前、子ども達を森に案内した時、ひとりの男の子が降りつもった落葉を見て、「おじさん、地球はだんだん大きくなるの」と問いかけてきたことがありました。たっけ・・・葉を落とした木々の中に、褐色の枯葉をいまだびっしりとつけている木があります。ヤマコウバシです。冬芽をもむとショウブの香りがします。



また緑の葉をつけたままつるを伸ばしている木があります。スイカズラです。冬の寒さに耐えているので、忍冬（にんどう）ともよばれています。若い葉はそのまま食べたり、乾そうさせて忍冬茶にもなるようです。ヤマコウバシもスイカズラも、春に向けて冬芽が開いてくると、それにおし出されるようにして葉を落とします。落葉樹が冬、葉を落とすのは、冬の乾そうから身を守るだけでなく、葉にたまった老廃物を落としてリフレッシュするためでもあります。常緑樹のカシ、シイなども五、六月頃いっせいに古い葉を落としてリフレッシュします。老廃物がたまっているのが落ち葉。それだと、有名なシャンソン歌手ジュリエット・グレコが唄う「枯れ葉」も、生物学的な不粋な目を向けると・・・ま、このくらいにしておきましょう。

ところで落ち葉からは、葉の特徴である緑の色が消えています。これは落葉する前に、樹木みずからが、葉緑体を酵素で分解し、葉の中にあるミネラルを落葉の前に茎の方へ回収しているからです。樹木はぬけ目ありません。

秋も深まってくる頃、カツラの下ではしょう油の匂いが、またサクラの木の下では桜餅の匂いが漂っています。匂いのもととは前者がマルトース、後者はクマリン。酸素を吸う力が弱まった葉が、わずかながらエネルギーを求めて発酵しているのです。

彩りとかぐわしい香りをみせながらの生の終わりのすがたには、静かな感動を覚えます。

(橋上 一彦)

## 昔の温泉・今の温泉

### 「鶴の湯・もえぎの湯」

昔の温泉のはなし…奥多摩湖が小河内村だった頃、「鶴の湯」はありました。それは、江戸時代から続く名湯でした。言い伝えでは「鶴が湧き出る湯につかって傷を癒した」とか。これが、鶴の湯温泉のはじまりです。

江戸時代には旅籠が4軒ほどでしたが、水没前には8軒の旅館があったそうです。その温泉も、都民の飲料水としてのダム工事で水没しました。ダムは昭和32年に完成しましたが、鶴の湯温泉として復活したのは平成になってからです。

温泉は、源泉をダム湖底の水深33mから汲み上げて、女の湯バス停脇のタンクに貯蔵されます。この湯は、奥多摩湖畔の旅館に運ばれて温泉が楽しめます。泉温は30℃、泉質はアルカリ性単純硫黄泉です。効能は、神経痛、疲労回復、慢性皮膚病、糖尿病によいとされています。

また、路線バス停名に「熱海」「女の湯」「湯場」があります。

今の温泉のはなし…奥多摩駅から歩いて10分で行ける、多摩川のほとりに「もえぎの湯」があります。地下深く古生層から湧き出る温泉だそうです。泉温は19℃、泉質はメタホウ酸・フッ素です。効能は、疲労回復、筋肉痛、神経痛、関節痛などによいとされています。

登山やハイキング帰りに最高です。奥多摩の四季折々に、奥多摩の山々や多摩川を眺めながら楽しめます。「いい湯だなあ～」といつのまにか癒され疲れがとれてしまうでしょう。温泉のあとには、名物のヤマメ料理などがおすすめです。

付近には温泉旅館が点在しているので「温泉のはしご」もいいですね。なお、もえぎの湯は月曜休館日となっています。(武田 和代)



## ガイドだより

### 「奥多摩の冬の鳥」

秋に日本より北から飛来して、春に帰る鳥を冬鳥と言う。奥多摩に飛来する冬の鳥は山野の鳥では、ツグミ、ジョウビタキ、シロハラ、アトリ、マヒワ、カシラダカ、ヒレンジャク、キレンジャク、イスカ等が見られる。

奥多摩は山にかこまれ、その間を清流の多摩川が流れ、氷川で日原川と合流している。このような地域性が樹木の種類の多様化を生み、必然的に木の実等が豊かで虫なども多く生息している。

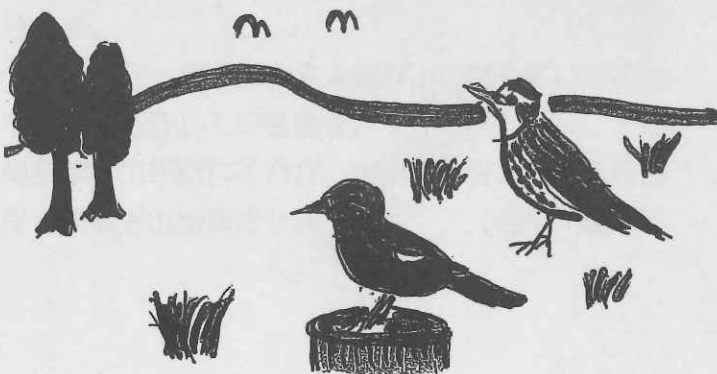
今回は、誰もがよく知っている冬鳥の代表であるツグミについて少しふれてみたいと思う。

ツグミはツグミ科に属し、全長24cmで(ムクドリくらい)シベリア大陸で夏を過ごし、10月中旬頃日本にやって来る。飛来当初は、山林にすみ次第に平地でも見られるようになる。地上ではホッピングしては立ち止まる姿をよく見かける。それはまるで何かを思索しているようにも見え「鳥の哲学者」だと言う人もいる。ツグミはシベリア地方から荒波を越えて日本に渡って来る代表的な冬鳥であるが、罾網を使った密猟が今だに横行し食料として売買されている。文明国を自負する日本にとっては、大変な恥と言わざるを得ません。

私たちは、奥多摩に渡って来たツグミをあたたかい目で見守ってあげたいものだ。翌年の春4月頃にシベリア地方に帰るまで。

最後に、ツグミはシベリア地方からどのようなコースで日本列島に飛来し、そして奥多摩にやって来るのか、興味はつきない。今回はツグミを取り上げたが、機会があれば奥多摩で見られる鳥たちを紹介して行きたいと思う。

(畑 幸夫) 以



## 施設案内

### 「奥多摩・水と緑のふれあい館」

水はどこからやってくるんだろう？

川はどこから始まるんだろう？

緑のダムってなんのこと？

奥多摩ってどんなところ？

どんな生き物がすんでいるの？

水と緑と奥多摩を再発見する場所。そして人と自然都市と水源地のよりよい関係を考える場所です。

電話 0428-86-2731

開館時間 9:30~17:00 休館日 水曜日

### —登山・ハイカーの方々へ—

◎登山計画書は提出しましたか。

登山計画書の提出…警察署、交番、奥多摩観光案内所、軍畑・御嶽以西の各駅で受付ています。

◎冬の登山注意

- ・凍結、積雪に注意してください。滑りやすいので、アイゼンが必要です。
- ・日没が早いです。ヘッドランプの用意を忘れずに。
- ・奥多摩の山々には多くの野生動物が生息しています。ツキノワグマ、イノシシ、サル等。鈴やラジオの携行など音で自分の存在をアピールすることが大切です。

◎登山道などの通行止め情報 (11/7 現在)

- ・川苔山 大ダワ〜足毛岩の登山道崩落  
躡平〜獅子口小屋跡の土砂崩落
- ・鷹ノ巣山 水根沢林道は登山道、橋崩落
- ・御前山 トチノキ広場〜栃寄沢ルートの登山道崩落
- ・林道 小川谷林道、日原林道の通行止め  
後山林道は工事の為、車両通行止め

青梅警察署山岳救助隊、奥多摩ビジターセンター情報より抜粋。なお、最新情報を警察、ビジター、奥多摩観光案内所へお問合せください。

青梅警察署 0428-83-2121

ビジターセンター 0428-83-2037

発行 奥多摩観光協会

住所 198-0212 奥多摩町氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集 名人達人・観光ガイドの会